## 九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

大学とローカルラジオ局の協働が生み出す地域間交 流 : 番組とイベントの共同制作を通じた「共感」 ベースのコミュニティの生成

長津, 結一郎 九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門

## 髙坂,葉月

九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門

## 中村,美亜

九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門

## 尾本,章

九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門

https://doi.org/10.15017/1905855

出版情報:芸術工学研究. 26/27, pp.65-78, 2018-01-22. 九州大学大学院芸術工学研究院

バージョン: 権利関係:

## 大学とローカルラジオ局の協働が生み出す地域間交流 ~番組とイベントの共同制作を通じた「共感」ベースのコミュニティの生成~

Radio as a Medium for Empathy Based Inter-Regional Community Development : An Action Research Approach

NAGATSU Yuichiro KOSAKA Hazuki NAKAMURA Mia OMOTO Akira

#### Abstract

This paper examines the role of local radio in relation to inter-regional community development. Collaborative action research was conducted as a project based on a partnership between academia and local radio in Fukuoka, Japan. Research was undertaken in the following steps; 1) co-production of a radio program that invited local creative talent, and a participatory exhibition themed on the connection of urban and rural regions, 2) post-project interviews, 3) analysis and modeling of the two projects and the relationships between various actors. It was found that, some urban listeners built empathy for rural regional issues aired on the program, and spurred them to action, leading to the development of communities. Empathy for local issues, as felt by the radio host, emerged as an important factor influencing listener involvement. Through this research, the potentiality of radio was demonstrated as an affective medium for interregional community development.

尾本章1

本研究の目的は、ローカルラジオ局が大学との協働を 通じて地域づくりや地域間交流に関わり、番組やイベン トづくりを行う事業をケーススタディとし、関わる人々 の役割や変化を整理することで、事業がどのような波及 効果をもたらすかを明らかにすることである。

ラジオのメディアとしての特徴は、パーソナリティの「声」を通してリスナーに直接的に情報を届けるところにある。例えば、ラジオは「新聞が話しかける以上に『あなた』に話しかける。つまり、ラジオはパーソナルな会話によりいっそう近いものを持っているから、新聞よりはるかに説得的なのである」<sup>1)</sup>と述べられているように、リスナーとの直接的な相互関係を結べるということが、その特色とされている。また 1964 年の『ラジオ白書』では、娯楽の座をテレビに奪われたラジオ復興のキーワードとして「マス・パーソナル・コミュニケーション・メディア」という言葉が創出された。ラジオは、不特定多数の大衆を相手にするのではなく、声を直接届けるという意味で限定的でありながらも多数の人々に届けるメディアなのである。

ラジオと地域に関する先行研究は、地域メディアに関する研究を中心として数多くみられる  $^{2/3}$ )。なかでも 90年代以降、地域の生活情報の収集と発信のツールとして発展してきたのが、コミュニティ FM である。地域課題に直結した活動を行うコミュニティ FM は全国に広がりを見せており、2016年 12 月現在で全国に 302 局存在する $^{*1}$ 。1995年阪神・淡路大震災を契機に制度化された臨時災害放送局は、2011年東日本大震災の際に次々と開

連絡先:長津結一郎,nagatsu@design.kyushu-u.ac.jp

<sup>1.</sup> 研究目的と背景

<sup>1</sup> 九州大学大学院芸術工学研究院コミュニケーションデザイン科学部門 Department of Content and Creative Design, Faculty of Design, Kyushu University

設されたように、非常時や復旧・復興に際してコミュニティ FM が役割を果たすことも増えてきている。またこのことから派生して、災害時だけではなく平常時から積極的に地域と関わりながら活動を行う FM 局も見られ、番組制作のみならずイベント制作や地域コミュニティ形成に資する活動を事業の一環として行う取り組みも多い。

またコミュニティ FM に対置して考えられるのがマス・メディアである。しかしマス・メディアには一般的に、地域社会とのコミュニケーションをおこなう受け皿がほとんどないため、内容が地域のニーズに対して噛み合っていないものも多いと言われる。メディアとリスナーとの間には、明確に分割する境界が、メディアの側の都合の良い形で意図的に用意されるという特徴を持つという指摘もある40。

一方、本研究の事例としてとりあげるラブエフエム国際放送株式会社\*2(以下、LOVE FM と称する)は、コミュニティ FM を前身とするローカルラジオ局である。ローカルラジオ局は一般に、全国ネットの番組を配信することが多いが、地域の個別的な情報にフォーカスした番組を独自に制作することもある。しかし、こうしたローカルラジオ局による地域への関わりが、地方都市においてどのような価値を生み出しているのかはこれまであまり言及されてきていない。

全国的な広がりではなく、かといって特定の狭い地域に限定されたものでもない、地域と地域とを具体的につなぐことのできる距離感で放送が行われているローカルラジオにおいて、地域づくりや地域間交流と関わるための鍵は何だろうか。

なおこれ以降、特記しない限り、前述した「ローカルラジオ局」やその制作によるラジオ番組のことを「ラジオ」と称する。

#### 2. 研究方法

#### 2-1. 研究プロジェクト発足の経緯

本研究は、北部九州を中心としたローカルラジオ局を 運営する LOVE FM と、九州大学大学院芸術工学研究院 附属ソーシャルアートラボ\*3(以下、SAL と称する)と いう研究機関による共同研究\*4という形で実施された。

SAL は平成 27 年度に誕生し、「社会の課題にコミットし、人間どうしの新しいつながりを生み出す芸術実践を〈ソーシャルアート〉と捉え、その研究・教育・実践・提言を通じて、新しい生の価値を提示していくこと」を目

的としている\*5。2年度目となる平成28年度には、地域 貢献が求められる昨今の大学の状況も相まって、研究や 知見の社会への発信と実装を活動のポイントとして置く こととした。具体的には、1)研究や実践を通じてSAL が出会ってきた、新しいアイディアで地域を豊かにする 活動を行っている人々のことを発信すること 2)福岡 県内の中山間地域にある八女市黒木町笠原地区において SALが行ってきたプロジェクト\*6に新たな展開を生み出 すことを目指したのである。それにより地域づくりや地 域間交流に関する新しい視座を得ることも期待していた。

表1に示すように、本研究のフィールドとなる福岡県には、NHKのAMが2局、ローカルFM局が3局、ローカルAM局が2局、コミュニティFM局が7局存在する(2017年8月現在)。このうち、LOVEFMと共同研究を実施した理由は2点ある。1点目は、SALの前年度事業ですでにLOVEFM関係者とのつながりがあり、研究を開始する素地が整っていたことである\*7。2点目は、LOVEFMが西日本鉄道(西鉄)グループの会社として、福岡の中心街である天神エリアで、西鉄沿線を含む複数の地域と連携したイベントを実施するなど、今回の研究目的に近い取り組みをすでに多く行っていたことである。

表1 福岡県内のラジオ局一覧(2017年7月現在)

	会社名	本拠地	開局
AM	NHK 福岡放送局	福岡県福岡市中央区	1931
AM	NHK 北九州放送局	福岡県北九州市小倉北区	1931
AM	KBC九州朝日放送	福岡県福岡市中央区	1954
AM	RKB毎日放送	福岡県福岡市早良区	1951
FM	エフエム福岡	福岡県福岡市中央区	1969
FM	CROSS FM	福岡県北九州市小倉北区	2008
FM	ラブエフエム国際放送	福岡県福岡市中央区	1997
コミュニティFM	ドリームスエフエム	福岡県久留米市	1998
コミュニティFM	FM八女	福岡県八女市	2012
コミュニティFM	北九州シティエフエム	福岡県北九州市小倉北区	2004
コミュニティFM	AIR STATION HIBIKI	福岡県北九州市若松区	2001
コミュニティFM	有明ねっとこむ	福岡県大牟田市	2016
コミュニティFM	コミュニティメディアパートナーズ福岡	福岡県福岡市中央区	2013
コミュニティFM	東九州コミュニティー放送株式会社	福岡県築上郡築上町	2000

#### 2-2. 研究アプローチ

本研究では、LOVE FM と SAL との協働で、1) ラジオ番組の制作と、2) それに関連したイベントの企画・運営を通じたアクションリサーチを行った。

アクションリサーチとは、「「こんな社会にしたい」という思いを共有する研究者と研究対象者とが展開する共同的な社会実践のこと」50であり、何を望ましい社会的状

態と考えるのかという「価値」を問う研究手法である。 特徴としては、①社会的課題の解決を目指す ②解決すべき課題にかかわる人たちと研究者が共に研究に参与する ③ステークホルダーは、互いの立場や違いを尊重し、互いから学びながら、協働して役割分担をする という 点が挙げられる 6。

もちろん現場に関わりながら観察を行う手法はアクションリサーチだけではなく、既存の活動に赴いて調査するフィールドワークや参与観察という方法もある。しかし今回の共同研究にあたり、ラジオ局が「地域づくり」という観点から行う取り組みは多くないことがわかった。そこで、地域づくりとラジオという観点で新しい実践を共同で立ち上げ、そこで起こることを考察することで、SALにとっては地域づくりにおける新たな視点の獲得に、LOVE FMにとってはラジオの持つ可能性の開拓に資するのではないかと考え、アクションリサーチの手法を採用した。

#### 2-3. 研究プロセス

本研究ではアクションリサーチとして、下記のプロセスを踏んだ。

- 1)番組コーナーの共同制作:「かもしとーと?~ソーシャルアートで地域を発酵~」
- 2) アートプロジェクトの共同実施:展覧会「縁側のながれ」
- 3) 事後インタビュー
- 4) 立場ごとの役割整理と分析

上記のプロセスに登場するアクターとしては、SALと LOVE FM のほかに、ラジオのパーソナリティ、ラジオ 番組のゲスト (「カモシスト」)、共同プロジェクトに参画 するアーティスト、ラジオのリスナーがいる。3)と4) では、これらのアクターたちの関わりとプロジェクトを 通しての変化について考察を行う。

以下ではまず、各事業の概略と反響について述べる。

#### 3. 事例報告

- 3-1. 番組コーナーの共同制作:「かもしとーと?~ソーシャルアートで地域を発酵~」
- ○実施背景

共同制作コーナーは、毎週月~木曜日の 22:00~23:30

に生放送されている人気番組「月下虫音」の中に、「かも しとーと?~ソーシャルアートで地域を発酵~」という タイトルで開設された。

「月下虫音」という番組は、「月明かりの下で静かに虫の声に耳を傾けるように、今日一日を振り返り、明日に向かう準備をするための時間。良いことは胸に保存、悪いことは昨日に置いて行こう」\*8と番組紹介に書かれていることからわかるように、一日が終わった夜にふと立ち止まって耳にするというコンセプトを前面に出している。生き物や虫、生態系などに詳しいパーソナリティ(番組では「DJ」と称している)の大田こぞうがつくりだす緩やかな空気感が特徴的な番組である。

「月下虫音」には、番組審議会から「コアなファンも多くリスナーのコミュニティも形成され、それをきちんとマネージメントされているように感じられる」といった評価が寄せられている\*9。こういった側面から、後述する共同制作コーナーのコンセプトに照らして LOVE FM 側が局内で検討し、この番組とのコラボレーションであればリスナーの反応が得やすいと予想し、今回の展開につながった。

#### ○コンセプト

共同制作コーナーを企画するにあたって、SALの前年度までの活動に基づき、「発酵」というキーワードを意識していた。平成27年度にSALが主催した企画「甕の音なひ」\*10は、九州大学大学院芸術工学研究院教授で作曲家の藤枝守による、焼酎の発酵音響を元にした現代神楽の創作上演の取り組みであった。この経験を通じSALでは、音楽・音響作品と発酵の関係性のみならず、芸術文化が果たす社会的役割を「発酵」というメタファーで考えることができるのではないか、という議論が広がっていた。

例えば、SAL 副ラボ長の中村美亜は以下のように新聞 記事に執筆した。

芸術文化を育むためには、芸術作品やその担い手を守ることよりも、社会の中で表現実践の場を醸成していくことが重要である。鍵となるのは、地域の資源と外から入ってくる刺激のブレンドだ。芸術文化というのは発酵のようなもので、そこに元々あるものと新しく入ってくるものが、うまく混ざり合って初めて豊かになる。しかも、熟成して発酵するまでには、

それなりの時間がかかる。最初は旨味がなくても、しばらく時間をかけて漬け込んでいるといい味が出てくる。この点で、自然・文化資源が豊富で、都会に比べて時間の流れが緩やかな九州に、移住やUターンの人たちが新たな発想を持ち込んでいることは、大きなアドバンテッジとなっている。\*11

#### ○実施プロセス

こうした背景から、2016 年 4 月~5 月の間に 3 回行われた事前打ち合わせにおいて、地域の文脈に対して新しい価値観を生み出す「創造的なアイディア」が地域に根付くプロセスを「発酵」と捉え、情報発信を行う番組を制作する方向で議論がまとまった。そのうえで「月下虫音」の 1 コーナーとして、毎月第 2 木曜日、22:30~22:45 の 15 分間が割り当てられ、平成 28 年 6 月から平成 29 年 3 月まで、計 10 回の放送が行われた。

「月下虫音」公式ウェブサイトには、このコーナーの 解説として下記のような説明文が書かれた。

九州各地域の"カモシスト"をラジオを通じてご紹介しながら地域を発酵。創造的なアイディアが地域に根付くプロセスを「発酵」と捉え、それを仕掛ける人 = "カモシスト"をご紹介していきます。 地域を醸す人に注目し、そのカモシストが社会や環境のどのような変化をもたらしているか?を大田こぞうが伺います。\*12

「カモシスト」という言葉は、パーソナリティの大田 こぞうによる造語である。これまでの SAL の実践において、アイディアが地域に根付くためには、「発酵」を促すキーパーソンが必要であることがわかってきた。それは芸術家であったり、新しい地域づくりの方法を模索している人であったり、活動の形態は多様で、一言では表しきれない役割を担っている。そこで今回は、そのような役割を担う人材を、大田のアイディアのもと、「カモシスト」と名付けたのだった。なお、番組名の「かもしとーと?」とは「醸してる?」という意味の博多弁である。

放送は第 1 回を除いては事前収録が行われたのだが、 事前収録では予定の 15 分を超過し話が盛り上がったため、超過分は「おまけコーナー」として、SAL が制作したウェブでの番組アーカイブでのみ聴けるようにした。 10 回の放送内容は、表 2 のとおりである。なお、タイト ルは、ウェブアーカイブ公開に合わせて、SAL が後から 付けたものである。

表 2 共同制作コーナー収録・放送日一覧

○2016年~2017年				)17年	
6	月	9	日	(木)	第1回収録・第1回放送 「カモシスト」って何?
7	月	6	日	(水)	第2回収録
7	月	14	日	(木)	第2回放送 土にこだわる
8	月	4	日	(木)	第3回収録
8	月	11	日	(木)	第3回放送 国東には国東固有の時間がある
8	月	22	日	(月)	第4回収録
9	月	8	日	(木)	第4回放送 糸島二丈と世界をつなぐ
10	月	6	日	(木)	第5回収録
10	月	13	日	(木)	第5回放送 里山の技と叡智
11	月	4	日	(金)	第6回収録
11	月	10	日	(木)	第6回放送 筑後のものづくりを世界に発信
11	月	23	日	(水)	第7回収録
12	月	8	日	(木)	第7回放送 アーティストと地域をつなぐ
12	月	15	日	(木)	第8回収録
1	月	12	日	(木)	第8回放送 生命体の音に耳を澄ます
1	月	18	日	(水)	第9回収録
2	月	9	日	(木)	第9回放送 感動体験型産業とは
3	月	1	日	(水)	第10回収録
3	月	9	日	(木)	第10回放送 想像力とつながり

#### ○番組内容

毎回の「カモシスト」=ゲストは、これまでの SAL の活動や SAL メンバー個人の活動でつながりのある人々から選定され、芸術家、会社経営者、地域づくりの専門家、美術館学芸員などが「カモシスト」として登場した。「カモシスト」たちは、大田の質問に答えるかたちで、日頃の活動と活動に対する地域の人たちの反応などを語った。毎回 15 分という短い時間に、カモシストたちが地域コミュニティを「発酵」させ、豊かな社会を創造する工夫が共有された。

#### ○番組の反響

「月下虫音」は、LOVE FM が 2011 年 1 月に天神エフエム株式会社 (当時) に事業譲渡されリニューアルした時から放送がスタートした人気番組である。また、大田はそれ以前にも福岡のコミュニティ FM で長年番組を担当していたこともあり、ファンであるリスナーも数多い。普段はゲストが頻繁に登場するタイプの番組ではなく、パーソナリティである大田こぞうによる昆虫や生態系に関する語りと、大田が選曲した音楽の放送で成り立っている。共同研究を立ち上げた当初は、今回招聘するゲストが昆虫や動物などのテーマに詳しい人々ではないことに対して、どのような反応がリスナーから寄せられるかは未知だった。

この点に関して、事後に番組の感想をリスナーからうか

がったところ、下記のような感想が得られた\*13。

- ・いろいろな企画の話が聞けて面白い。
- ・普段なかなか聞けない話が聞けた。
- ゲストの話は、どれも思いもよらなかった。

なかでも象徴的な感想はラジオネーム「なかはらくん」 からのコメントである。彼曰く「月下虫音だからできる コーナーだと感じた」という。大田に対しては「社会全 体を生態系ベースで考えている」人だと感じているとい う。自身も災害ボランティア活動などで非都市部に足を 運ぶことも多いという「なかはらくん」は、都会だと自 然から切り離されてしまい「自分が生態系の中にいると いうことを実感できなくなってしまう」と話し、有機的 なつながりが大切だと感じている。その考えから言うと、 今回の番組の主旨は納得のいくものだったという。\*14

# 3-2. アートプロジェクトの共同実施:展覧会「縁側のながれ」

#### ○実施背景

研究プロジェクト開始時は、毎月の放送の他に、LOVE FM と SAL との共同企画により、地域間交流に関わるイベントを提案することを目指していた。LOVE FM はこれまでに人気 DJ と地方をめぐるバスツアーなどは数多く企画していたが、今回は、それとは異なるアプローチで地域間交流に関わるアイディアを検討することになった。SAL では平成 28 年度、福岡市と筑後地方の中山間地域を含む八女市黒木町笠原地区をつなぐアートプロジェクト「FUKUOKA×YAME REMIX」を実施することになっていた\*15 ことから、それに関わる企画を共同実施する運びとなった。

#### ○コンセプト

八女市黒木町笠原地区は 2012 年の九州北部豪雨で大きな被害を受けた地域で、いまだ復興の途上にある。一方、「月下虫音」には、2013 年より「女川さいがい FM」(宮城県女川市。2016 年 3 月に終了)にコンテンツを提供し、番組を放送して好評を博した経緯があった。こういった側面から大田が共同企画の実施にも関心を寄せ、「月下虫音」とのコラボレーションが決まった。そして、「月下虫音」のリスナーの特性を鑑みて、集団行動を強い

ることなく関わりを促すことができ、かつ、異なる二つの地域をつなぐことのできる仕掛けを考えることになった。

#### ○実施プロセス

大田ははじめから、人の関わりを促す方法として、「石」に目をつけた。八女の河原から運び込まれた石が、天神エリアに一定期間置かれ、天神を訪れる人たちによって絵を描く、工作する、などの方法で何かを施された後に、再び八女の河原に戻される、というアイディアだった。福岡と八女をつなぐための方法として、石を媒体として何ができるかを考えたのである。

大田とLOVE FM、SALとで何度か話し合いを設けるうちに、「カモシスト」として「かもしとーと?」に出演していたうちの2人にプロジェクトに参画してもらうことになった。1人は「FUKUOKA×YAME REMIX」への参加が決まっていたアーティストのジェームズ・ジャックである。彼とSAL、それにアートマネジメント人材の育成プログラムとして「FUKUOKA×YAME REMIX」に参画していた受講生たち\*16と、この時点ですでに多くの打ち合わせを行い、福岡市中央区大名地区を会場にすることを決め、リサーチを始めていた。またもう1人は、笠原地区を拠点に活動するNPO法人山村塾事務局長の小森耕太である。彼の参画によって、プロジェクトで生み出されるストーリーを八女に暮らす人々にとっても意味のあるものにしたいという大田とSALの思いを共に形にすることを目指したのである。

小森は地域の文脈を活かす仕掛けとして、棚田の石垣の裏で棚田の構造を支えている「ぐり石」と呼ばれる石に目をつけた。2012 年の水害以降に笠原地区では多くの棚田が耕作放棄地となり、小森らはその棚田を復興する活動も行っていた。そこで、耕作放棄地になった棚田の「ぐり石」を取り出し福岡市内に持ち込み、終了後は新しい棚田をつくる「ぐり石」として再利用する、という案を出したのだ。そこで、当初の大田のアイディアと合わせ、「ぐり石」に来場者の手で何かを施す企画を行うことに決まった。具体的には、土を素材にして自作した画材(クレヨン)や、マジックペンなどで、笠原地区に対しての想いや感じたことを描いてもらうというものであった。

ジャックは、展示空間の設計に関するアイディアを出 した。大きく伸ばした一枚の笠原地区の写真を展示会場 の奥に掲げた。床には、八女と展示エリアの福岡市中央 区大名地区の「水」をモチーフにしたスケッチに従って 石が並べられることになった。

プロジェクトに関わるメンバー全員が顔をあわせる機会は、1月初旬の現場視察で初めて実現した。八女市黒木町笠原地区に赴いた大田は、水害の痕跡が残る場所を訪れて石の選定を行ったほか、土にこだわった有機栽培を継続的に行う茶農家の大橋鉄雄とも交流をした。この経験は大田にとって印象深かったようで、視察日の夜の放送では、大橋の話題を大きく取り上げていた。

1月半ば、山村塾に滞在していたボランティアスタッフの協力を得て、山村塾スタッフが約1.2トンの石を集めた。石は肥料袋に入れられ、2月初旬に、展覧会の会場となる福岡市中央区大名にトラックで運ばれてきた。田んぼから掘り起こしたばかりの石は泥だらけで、来場者が気軽に手にとれる状態ではなかったため、SALのスタッフと受講生が中心となり、大量の石をひとつひとつ手で洗い、乾かす作業を行った。その重労働の状況を見た大田は、その日の夜の「月下虫音」で企画の準備状況を発信し、お手伝いを呼びかけた。すると、翌日の石洗いには複数のリスナーが訪れ、SALのスタッフや受講生とともに汗を流した。

以上の実施プロセスについて表3にまとめた。

表 3 共同展示のプロセス

○2016年~2017年		17年					
8	月	18	日	(木)	打ち合わせ(大田、LOVE FM、SAL)		
9	月	29	日	(木)	打ち合わせ(大田、LOVE FM、SAL)		
11	月	29	日	(火)	スカイプ打ち合わせ (小森、SAL)		
11	月	30	日	(水)	打ち合わせ(大田、LOVE FM、SAL、ジャック)		
12	月	21	日	(水)	スカイプ打ち合わせ(小森、SAL、ジャック)		
1	月	10	日	(火)	八女市黒木町笠原地区の視察(大田、LOVE FM、ジャック、小森、SAL)		
1	月	26	日	(木)	番組にSALスタッフが出演		
1	月	27	日	(金)	打ち合わせ(大田、LOVE FM、ジャック、SAL)		
2	月	1	日	(水)	展覧会「縁側のながれ」搬入 (SAL)		
2	月	2	日	(木)	展覧会「縁側のながれ」搬入(大田が放送で呼びかけ)		
2	月	3	日	(金)	展覧会「縁側のながれ」搬入 (リスナーが手伝う)		
2	月	4	日	(土)	展覧会「縁側のながれ」開催(~12日(日))		
					トークイベント「生きる土」実施		

#### ○展覧会の内容

2017年2月4日(土)~12日(日)に、エンジョイスペース大名(福岡市中央区大名)を会場として、展覧会「縁側のながれ From Stone To Sand」(図 1)を実施した。これは、SAL が主催するアートプロジェクト「FUKUOKA×YAME REMIX」のイベント「八女の大名茶会」の一環として実施された。展覧会の実施のほか、トークイベントなどの関連イベントも実施した $^{*17}$ 。

大田はこのうち、2月4日(土)に実施したトーク「生



図 1 展覧会「縁側のながれ From Stone To Sand」(撮影: 富永亜紀子、2017 年 2 月 4 日)

きる土 (The Life of Dirt)」にサプライズで登壇し、アーティストのジャックや笠原地区で交流した大橋と鼎談した

八女から運び込まれた 1.2 トンの石は、前述した通り、ジャックのスケッチに従い、毎日異なる配置で床に並べられた。笠原地区の谷をイメージした日もあれば、博多湾をイメージした日もあり、力強い一直線の日もあった。

#### ○展覧会の反響

会場には、8日間の会期中に300人以上の人が訪れた。 常連のように何日にもわたって訪れるリスナーもいた。 来場者は目の前に積まれた石が辿ってきた道のりと時間 に思いを馳せながら、土でつくった画材やペンを手にと り、石に思いを託していた。

最終日の展示終了後、たくさんの人の手がかかった石は、再び笠原の田んぼへと帰っていき、笠原の棚田づくりに使われることとなった。この搬出時にも、大量の石の袋詰めと荷出し、および会場の現状復帰という重労働に、複数のリスナーが参加した。

#### 4. 分析:事業における役割と事業がもたらした変化

これまでみてきたように、今回の共同研究では、大学とラジオ局の連携という大枠の中で、大学が紹介したゲスト (アーティストや「カモシスト」)に、ラジオ局の紹介によるパーソナリティが関与することで、オリジナルコーナーの放送や共同企画が実現できた。そして、その放送や企画においては、リスナーの関与が多数みとめられた。

ここからは、番組の放送内容や企画内容、事後のインタビューなどを基にして、本共同研究に関わった人々が果たした役割やもたらしたもの、および協働による成果を整理する。なお本節に際しては、事業が終了した段階で、関係者へのインタビューを実施した。いずれも質的研究法で用いられる半構造化インタビューの形式を取り、今回の企画に関わった印象を聞いた\*18。

この結果もふまえて、4-1.大学 4-2.ゲスト 4-3.アー ティスト 4-4.ラジオ局 4-5.パーソナリティ 4-6.リ スナーという6つの立場ごとに記述していく。

#### 4-1. 大学(九州大学ソーシャルアートラボ)

大学が担った役割は、主に以下の内容に分けられる。

- 1)番組や企画に関する基本コンセプトの設計
- …「発酵」をテーマとした番組づくりを行うこと、「創造的なアイディアが地域に根付くこと(発酵)を仕掛ける人」を招聘することや、パーソナリティやリスナーと協働で企画をつくるというフレームワークの提示を行った。
- 2) 共同研究や業務委託に関する諸手続き(契約締結等)
- 3) 共同プレスリリースの発信
- 4) ゲスト (4-2.) の選定
- …コンセプトに基づいて、前述したゲスト (=カモシス
- ト)を選定し出演依頼を行った。
- 5) ラジオ局 (4-4.) へのゲスト紹介、収録立会い
- …毎回の収録にはSALのスタッフが必ず立ち会った。
- 6) 共同展示企画 (3-2.) のコーディネート

ゲスト選定に関しては、今回は大学が主体的に行い、 ラジオ局はその拡散を行うという立場であった。この立 場について、LOVE FM で本企画を担当した波多江和之 は番組テーマの「発酵」になぞらえて、大学とラジオ局 の協働とその波及効果について「発酵プラン」「拡散」「醸 成」と表現していた。波多江は、SAL が基本コンセプト を設計しゲストを選定・招聘していたことを「発酵プラ ン」と名付け、

今回 SAL の方で、発酵プランを作ってくれていたとしたら、番組とかラジオ局の方で発酵させる菌を拡散させた、みたいな。で、リスナーさんと一緒にこれを醸成させるみたいな。[中略] 菌をもらった人たちが、僕らが向かってほしいところにそれを持って、散らばって、いろいろ動いてくれているっていう、そういうことが起こったような気がしたんですね。\*19 (強調は筆者)

また波多江は、もし次回このようなことを実施する場合にどのような役割分担が望ましいか、という問いかけに対して、

番組的に、こういう人たちもカモシストなんじゃないの? みたいな人たちをピックアップするっていう。たぶん、(大学が選ぶのとは)全然違う観点の人たちになるかもしれないですけど。もしこれに第2期があったとしたら、<u>じゃあ次はそれをセレクトして</u>ねって言われたら、全然、やらせていただきたい部分

#### ではあります。\*20 (強調は筆者)

と述べ、現状のように大学が先導し、ラジオ局の側が拡 散するという体制が望ましいとしつつも、大学の監修の もとでラジオ局側からゲスト選定の提案があっても良い のではないかという意見を出した。

なお、1)  $\sim$ 5) の役割は、当初よりある程度想定されていた部分ではあった。しかし6) に関しては、共同企画の内容の深化と具体化に伴って発生した役割であった。基本的には、スタジオで対面する以外で SAL と大田が直接やりとりをすることはなく、SAL 事務局は LOVE FM 担当者の波多江と連絡を取りながら、物事を進めた。さらに、共同展示企画にジャックと小森が加わった後も、全員が顔を合わせられたのは 2017 年 1 月の笠原地区視察時のみであり、それ以外は SAL 事務局が個別に意見をうかがい、その結果を他のアクターに知らせつつ構造を固めていくという方法を取っていた。

#### 4-2. ゲスト (「カモシスト」)

ゲスト (「カモシスト」) は、番組に出演した。ゲストの普段の活動内容に応じていくつかのメイントピックを事前に決め、フリーディスカッションの形式で番組収録を行った (番組内容については表2を参照のこと)。大学の監修のもと選ばれたゲストたちは、大学教員、アーティスト、会社社長、地域 NPO 事務局長、美術館学芸員など多様であり、一見すると共通項が見えづらい。しかし、「創造的なアイディアが地域に根付くこと (発酵)を仕掛ける人」という点では共通していた。今回の番組制作は、さまざまな場所に新しいアイディアは眠っており、それらはすでに地域と関わりを持っており、思わぬ展開をもたらしはじめているということを、「カモシスト」の紹介を通じて提示する試みであったと言える。

その特徴はどのように映ったのか。番組でパーソナリティを務めた大田こぞうはインタビューの中で、実際に行っている事業は異なるが、「同じ方向を見ている感じがする」と話した。

私たちは、目の前の生活、自分の生活とか、目の前の すごい、半径の狭いところを見ていると思うんです けど。それの<u>もう一歩先</u>というか、<u>自分の生活圏を出</u> たところの人の生活とか、そういったもの、自分のこ と以外のことを見て、動くことができる人というか。 みんなそれがすごい共通項だと思ったんですよね。 [中略] それで、<u>見ているのは私たちよりずっと先</u>。 先の方。みんなが惹かれるのは、その先を見ているっていうこと、その姿勢に気付くっていうのもあると 思うし、<u>見ている先に、光のようなものを感じられる</u>からなんだろうなと思いますけどね。\*21 (強調は筆者)

先述の通り、「月下虫音」は熱心なリスナーが多い番組である。イベントのたびに数多くのリスナーが来場し、思い思いの活動を行っている(詳細は後述する)。大田はこうしたリスナーたちにも、カモシストが与える影響は大きかったのではないかという印象を抱いたという。最終回となった第10回の放送で、

特別なことを何か、私には何もできないって思っても、実は何かに一つ気づいていけば、一人ひとりがみんな、それぞれカモシストになり得るんじゃないかなという風にも思いました。[中略]「月下虫音」では今後も、地域を醸していくカモシストを応援してまいります。次に登場するカモシストは、もしかしたら今聞いていらっしゃるあなたかもしれません。\*22 (強調は筆者)

と呼び掛けたのは象徴的である。

#### 4-3. アーティスト

前述のとおり、「縁側のながれ」の展示企画には、アーティストであるジェームズ・ジャックが関わった。彼は以下のような役割を果たした。

- 1) 企画のディレクションと、パーソナリティとの協働 …前述の経緯で、発案されたアイディアを企画化するプロセスを担った。
- 2) 展覧会企画・実施
- 3) トークイベントの運営・登壇

プロジェクトの経緯は前述したとおりで、ジャックは 具体的な展示プランを考えた。ジャックのプラン実現に 必要な準備(石の洗浄や移動)に関して、ラジオ局やパーソナリティは、番組内で告知をする形で関わっていっ た。ここでは今回の企画でアーティストの果たした役割 について、LOVE FM 側の意見をもとに紐解いていく。 大田はジャックとの出会いについて「これこそ化学反応だった」と話す。当初考えていた企画\*23は「よくよく後から思ったら、完全にこっち側の独りよがりだったなって思う」と語る大田は、

私が持っていた最初のイメージより、明らかに大き く膨らんで行ったと思うんですよ、みんなで話すこ とによって。[中略] みんなの話を聞いて取り入れて、 一回自分の中にインプットし直して。それがすごい よかったなって。\*24

と話しており、企画の仕掛け手としてアーティストと共 に考えながら、特定の地域に対して距離がある場所から アプローチする手法を見出していったことがわかる。

関わる、参加する人たちの想像力の問題であって、口頭で説明しなくても私はいいと。JJ (ジャック) とも話したんですけど、これがどういう意味があるとかいうのは、いちいち言わなくていい。どういう意味ですかって聞かれたらもちろん説明したらいいと思うけど、何で石が来たのかなとか、この石は八女のどこから来たのかなとか言うのを、想像することからも始まると思うから。それで、気持ちが八女に行けばいいことだと思ってのことなので。\*25 (強調は筆者)

共同研究発足当初は、ラジオ局側が SAL 主催のイベント「FUKUOKA×YAME REMIX」になんらかのかたちで参画することは想定していたものの、SALのアーティストとコラボレーションがなされることは想定していなかった。とはいえ、大田のアイディアをかたちにするアーティストが「カモシスト」の中から選ばれたことは、今回の共同研究においては自然な流れだったと言える。

### 4-4. ラジオ局 (LOVE FM)

ラジオ局が担った役割は、以下の通りである。

- 1) 企画化
- 2) パーソナリティへの提案
- 3) 事務手続き
- 4) 共同リリースの発信
- 5)番組の放送

#### 6) イベント告知協力

ここでは、ラジオの特性および、それに対して今回の共同研究を通じてアプローチできた点について述べる。 波多江へのインタビューからは以下の2点が浮き彫りになってきた。1つは、ラジオという音声メディアならではの特性である。波多江は近年の SNS の隆盛に伴って、「SNS やウェブでいいじゃないか」という声も多くあると話す。それに対し、ラジオというメディアは何が異なるのかを考えた波多江は、「体に染み込んでいく」という言葉を使い、以下のように話した。

伝わる浸透度というか、瞬間的に、瞬発力はたぶん、いわゆるウェブ上の SNS はあるし、広がり方も大きいのかもしれないですけど。たぶん、それだけで。 体に染み込んでいくというか、ずっとその人に残るような伝わり方、ラジオの声に乗っかっていくっていうこの入り方は、今回イベントで来ていただいたりとか、その感想を聞いたりとかして、その違いというか、ちゃんと人の血が通っている伝わり方っていうのか分からないですけど、気づかせていただけた気はします。\*26 (強調は筆者)

波多江は、声を用いるメディアであることが、その先で受容している人々への伝わり方に影響している、という感触を得ていることがうかがえる。そしてその媒体となっているのが、後述するように、パーソナリティの特性でもある。

もう1つは、ラジオでの発信と地域との関わりについてである。波多江は、カモシストたちがラジオ局に与えた影響を尋ねた際に、以下のように述べた。

地域との関わり方は、メディアなので、とある絞った 地域というよりは、不特定多数になるとは思うんで すけど。その不特定多数を、常に発酵をさせているっ ていうイメージでいるんですけど。ラジオ番組自体 がですね。[中略]強力に発酵させているキーマンた ちの話を聞くと[中略]<u>どういうアクションをすると</u> この地域にこういう行動が生まれたとかっていう [中略]事例を直接聞くことができるので、ラジオの あり方とか、リスナーさんとのつながりとかにおけ る、すごい勉強になったっていう視点ですけど、本当、 一緒だなと思った。

まちづくりとかと、リスナーさんと番組を一緒に 作るって、すごい近いなぁと思った。\*27(強調は筆者)

この発言からは、今回の企画を通じて、「まちづくりのように番組をつくる」視点がラジオ局の中に育っていったことがうかがえる。カモシストたちが地域に対して仕掛けていることと、ラジオ局が地域に対して仕掛けていることは、もちろん同一視はできない。しかしここでは、地域への関わりに関して、先進的な活動をしているカモシストたちに刺激され、ラジオ局では何ができるのかと試行錯誤する契機になる、ということが示唆されている。

#### 4-5. パーソナリティ(大田こぞう)

パーソナリティである大田こぞうが担った役割は、次のとおりである。

- 1)番組での発信
- 2) 企画原案の検討
- 3) アーティストとの協働
- 4) トークイベントへの出演

これを踏まえたうえで、番組で発信する際のパーソナリティの振る舞いについて、大田からのインタビューをもとに確認していく。

大田は「パーソナリティ」という言葉を用いて、普段番組で発信する際に考えていることを述べている。自分の存在を「公民館の管理人のおばちゃん的なポジション」と位置づけ、「もちろん自分が一番聞きたいことを聞くんですけど、みんなが聞きたいことも聞きたい」と話す。

皆さんから寄せられるメッセージを、私が代表で、村の拡声器で読んでいるぐらいの感じで。だから私は、ただの集約して拡散するための存在だってずっと思って来たから。\*28

そしてそのことを、パーソナリティとしての「フィルター」であると述べる。

<u>リスナーさんはそのフィルターを通してじゃないと</u> <u>実感できないんだと思います。</u>だから「こうだからこ うよ」って原稿を読むように話したところで、「ふー ん」って終わっちゃうことなので。それはたぶんパーソナリティっていう名前がついているだけあって、その仕事だと思うんですけど。「私はこういう風な話を聞いてこう思った、こう感じた」っていうのが、必要な時と必要じゃないときがあるんですよね。話をするときに。毎回それだとトゥーマッチだと思うんですけど。\*29 (強調は筆者)

リスナー側は、大田というフィルターを通して、そこで流されていることを理解している。そこには、大田の工夫として、情報をある程度取捨選択していることがうかがえる。それは、「編集」もしくは「翻訳」とも呼べる作業であろう。

訳すときに、どこが一番大事かなっていう、伝えるべき一番大事な軸はどこなのかなっていうところをやっぱり、ふるいにかけていって残していかないといけないけないから、で、興味も持ってもらわないといけないし。なんですけど、こっち側だけプカッと浮いて流れていっちゃったら絶対ダメじゃないですか。置いてきぼりにしちゃったら絶対だめだから。\*30 (強調は筆者)

ラジオ局からこの共同研究の話があった時に引き受けることを決めた理由について大田は、自らの体験と重ね合わせて考えられる題材であったからだと話した。大田は以前、自らが持っていた畑が水害で流された経験をしているという。今回の笠原地区との関わりを提案された際、「あの現状を目の当たりにした時の衝撃」が、承諾の後押しをしたという。

結局、一番訴えかけたかったところは、いつ自分がそういう被災地というか災害とかの現場に居合わせるかっていうか、自分がそういう目に遭うか分からない。[中略] それでもその場所で毎日当たり前のように生活している大橋さんみたいな人ね、その大事にしているものを、これからも大事にしようとしている人たちがいるっていうのがやっぱり、すごいなと思うから、そこをどうしても伝えたかったので、「かわいそうやろう?」じゃなくて、その強さっていうのを伝えたいって思ったから。\*31 (強調は筆者)

このことからわかるのは、地域に関わる放送を発信しさえすれば、パーソナリティが誰であってもリスナーの心を動かす深度を持つわけではない、ということである。ラジオネーム「飛んでゆくコンドル」へのインタビューでも、「たとえば LOVE FM の朝の番組の中に「かもしとーと?」があっても、あまり目立たなかっただろうと思います」「「かもしとーと?」を月下虫音の中に組み入れたのは、適材適所だったのではないでしょうか」\*32という発言があった。パーソナリティには、地域のもつ状況に対する深い理解と共感に基づいて発信をするということが求められているようだ。

#### 4-6. リスナー

番組のリスナーたちは、以下のような役割を果たした。

- 1) ラジオ番組への聴取・反応
- 2) 企画への参加
- 3) コミュニティ形成や活動

ラジオ番組では、リスナーからのリアクションは通常、メールや FAX などでのお便りや、SNS などでの書き込みでうかがうことができる。しかし今回の企画の大きな特徴は、具体的にリスナーたちの行動に結びついた点だと考えられる。

企画「縁側のながれ」では、パーソナリティの呼びかけに応じて、展示の準備作業である「石洗い」を手伝いに来たリスナーが複数名いた。彼らはラジオを聞いて集まって来たという以外には、つながりのない人々である。彼らはその後の会期中も訪れたほか、別のリスナーたちも来場し、撤収作業にも尽力したリスナーもいた。このことは、リスナーたちがラジオ番組を聴取して受容するだけではなく、自ら行動を起こすというステップを踏んでいったことを物語る。

大田のインタビューからは、リスナーの別のリアクションを知ることもできた。NPO 法人山村塾事務局長の小森耕太がゲスト出演した回の後、「笠原にさっそく行ってみました!」という報告が番組にあったという。また、3月に行われた LOVE FM FESTIVAL(以下、ラブフェス)の会場で大田に話しかけたあるリスナーは、「カモシストは、こっちから名乗り上げることはできないんですか?」と尋ねたという。このリスナーは児童劇団を長年運営しながら地域に関わる活動を行っているそうで、ラ

ジオを聴いて自身の活動との親和性を感じたということ だ。こうした反応について大田は、拡散を通じて「新たな人材発掘」につながっているのではないかと話した。 そして、その反応について「呼応」という言い方をし、

私が直接そこにいなくてもそうやって来てくれたりとかっていうような、そういう結びつきみたいなのが、普通なのか、<u>ラジオというメディアが持ってる魅力として、リスナーさんが呼応してくれる</u>っていうのが、大体どこにでもあることなのか、それとも「月下虫音」特有なのかっていうのは私にはちょっと判断がつかないことなんですよね。\*33 (強調は筆者)

と述べる。

大田自身、番組に集まってくるリスナーの特性につい て気を払っているという。

皆さんなんか、結局、何かこう、同じものを抱えていたりとか、そういうなんかこう、分かる分かる、みたいな。連帯感っていうのかもしれないけど、そういうのは、ちょっと他の番組より強いだろうとは思います。\*34

たとえば、心の病気を抱えた人からのメッセージを番組のなかで読むことがある、と大田は話す。そのようなメッセージを躊躇なく読むことで、「自分だけじゃないんだ」という感情をリスナーに呼び起こす。「心の病気とかっていうとアンタッチャブルな感じがあるけど、でもそれを表に、「普通のことよ」って、「誰にでも起こるよ」っていうふうな位置づけにしていくのは、たぶん私の役割かな」と大田は話している。

その結果、つらい経験もわかちあえるコミュニティが、番組のリスナーたちのあいだで生成されているという。
LOVE FM が企画する他のイベントでも、大田が出演すると聞けばたくさんのリスナーが集まり、互いにラジオネームを言い合い、情報交換をしているそうだ。ラジオネーム「しぶちん」からの話によれば、もともと「月下虫音」が表通りに面したスタジオで放映していた頃に集まっていたリスナーたちが仲良くなりはじめたのが、コミュニティができるきっかけだったという。

こうしたコミュニティに対して大田は、つらい経験を した人が、居場所をみつけるプロセスが生まれていると 話す。

「月下虫音」っていう番組に関わることで、自分のポジション、役割というか、そういったものを見つけていかれている人がやっぱり中にはいらっしゃって。そういう人たちが中心になってラブフェスのときとかも、結構、みんなが集まりやすい空気を広場の中につくり出したりしてくれているんじゃないかなって思うんですよね。[中略] その方たちが、「縁側(のながれ)」にも来てくれていたと思うんです、たぶん。それは、私が止めもしないし、「やって」とも言わないで自発的になさっていることなので、それで自分の居場所を見つけていらっしゃるんであれば、いいことじゃないのかなと思います。それが行動力につながっている。\*35

ここまで見てきたことを整理すると、リスナーの関与には大きく分けて3つのフェーズがあるように思われる。 すなわち、リスナーはラジオ番組を「聴取」し、パーソナリティの発信していることに「共感」を覚えて呼応し、 具体的な「行動」を起こしている。

#### 5. 考察

パーソナリティやリスナーへのインタビューを通じ、パーソナリティの地域課題への理解と共感、そしてそのことを広く伝えるための「編集」と「翻訳」の作業が、リスナーの共感を呼び起こし、行動を促すことがわかってきた。つまり、地域と地域とを具体的につなぐことのできる距離感で放送が行われているローカルラジオにおいて、地域づくりや地域間交流と関わるための一つの鍵は、「共感」を生み出すことだと言えそうである。

そして「共感」について、今回のケースをもとにさら にフォーカスしてみると、番組やイベントの企画からリ スナーの行動に至るまでに、リスナーにおける「共感」 とパーソナリティにおける「共感」という2つの「共感」 が生まれているのがわかる。

まず、リスナーの「共感」は、パーソナリティの語りによって生み出される「共感」である。「月下虫音」という番組においては、本共同研究が始まる前から、パーソナリティとリスナーの関係性がすでに強固であった。そのため、リスナーがパーソナリティの発言に「共感」し

やすい状況がすでにできあがっていた。

一方、パーソナリティの「共感」は、「カモシスト」たちの活動や、災害の現状などに対してパーソナリティ自身の経験から呼び起こされた「共感」である。番組制作と共同企画の2つが両輪となり本研究が進んで行ったという企画構造自体が、この「共感」を呼び起こすための環境に寄与していた。SALとLOVE FM の協働を通じて、パーソナリティが「カモシスト」たちと出会う場や、アーティストや地域で活動する人々の想いに触れる場が設けられたことで、パーソナリティの「共感」を喚起したのである。

このことを図2にまとめた。

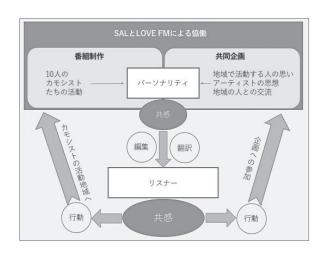


図2 2つの共感が生まれる仕組み

まず SAL と LOVE FM により番組制作と共同企画を 行うフレームワークが設計され、それを実施するなかで パーソナリティに「共感」が生み出された。パーソナリ ティはこれらの企画を通じて得た情報や感情を「編集」 「翻訳」し、リスナーたちに届けた。

そしてリスナーたちはパーソナリティの声を手掛かりにして「共感」を生み出し、それぞれの「共感」から「行動」を起こしたリスナーたちが、カモシストたちの活動の場で、共同企画の場で、それぞれにゆるやかなコミュニティを形成していた。SAL と LOVE FM による協働により、「共感をベースとした地域課題への関わりを生むコミュニティの生成」とも言うべき波及効果を生み出しているのである。

地域間交流のためのイベントというと、バスツアーで 現地に赴いたりする観光イベントや、物産展をまちなか で開くという商業ベースのイベントなどが思い浮かぶ。 しかし今回は、関わる人それぞれの想いを託すための「仕掛け」(今回の場合は「石」であった)が介在し、さらにそれが地域のもつ状況に対する深い理解と共感に基づいてパーソナリティが発信をするという「マス・パーソナル・コミュニケーション・メディア」としてのラジオが介在することで、それぞれ物理的な距離がありながらも、お互いのありように想いを馳せる形での地域間交流を行う試みになったのではないだろうか。

#### 6. おわりに

こんにち、地域づくりをめぐる事情は変化し続けている。また九州では近年、地震や水害のような大規模な災害が、特に中山間地域や過疎地などで頻発している。このような状況に胸を痛め、手を差し伸べたいと思いながらも一歩を踏み出せずにもどかしい思いを抱く人も少なくない。彼らにとって行動の契機となる「触媒」は、どのように創出することができるのだろうか。

こうした問いに対しても、今回のケースで示してきたようなラジオ番組や企画の制作が寄与する部分が少しずつ見えてきたように思われる。ラジオは特定の土地に住む人以外にも地域課題を想像させ、「共感をベースとした地域課題への関わり」を促すことが可能なメディアである。そしてそこから小さな一歩を踏み出した人同士でゆるやかなコミュニティを生成する。そのことでラジオは、さまざまな場から地域に関わろうとする人同士の新しい「地域間交流」を生み出すメディアになりうるのである。

他方で、課題として残された点も2点ある。1点目は、今回の研究主体である SAL を、モデル化の際にどのように一般化すべきかという点である。大学となれば教員や研究者だけではなく、学生の関与も当然のことながら期待されるところであるが、今回は学生の関与は限定的であった。また、アート NPO のような芸術に関わる運営団体が代替可能であった点も多く、今後の精査が必要である。2点目は、今回の成果を持続的な取り組みにしていくための視点である。本研究では当初、今回の成果をモデル化し、他の地域や団体でも応用可能なスキームを構築し、LOVE FM としてもそれらを活用した新たな事業展開につなげることを視野にいれて検討を行っていた。しかし結果的に今回はそこまで大きなスキームを描くには至らず、今後の展開に向けた状況整理と次なる展開に向けた第一歩を踏み出したところである。ここで整

理した状況をもとに、今後の研究でさらに発展的に展開 することを期す。

#### 謝辞

本研究実施にあたっては、九州大学大学院芸術工学府 非常勤講師・ソーシャルアートラボアドバイザー(広報) の伊藤寛氏に全面的な協力をいただいた。ここに御礼を 申し上げる。

#### 注

- \*1 日本コミュニティ放送協会調べ http://www.jcba.jp/community/index.html (2017年7月10日最終取得)
- \*2 LOVE FM は、福岡県全域と、熊本県・長崎県・佐賀県・大分県・ 山口県の一部を放送エリアとする FM 局である。日本語、英語を中心 に中国語、ハングル(韓国、朝鮮語)、タガログ語、スペイン語、ポルト ガル語、インドネシア語、タイ語、フランス語で放送を行っている点 が大きな特徴である。1996年(平成8年)8月に設立された株式会社 九州国際エフエムにより、九州初の国際エフエム放送局として1997年 (平成 9 年) に開局した。2011 年、コミュニティ FM ラジオ局 「FREE WAVE (フリーウェーヴ)」(1996年開局)を運営していた西日本鉄道 株式会社傘下の天神エフエム株式会社と吸収分割が成立。2011年に天 神エフエム株式会社による放送となった。同年、社名変更でラブエフ エム国際放送株式会社となる。また同年、インターネットでのサイマ ル放送「radiko」での配信をスタートさせた。なお DJ の大田こぞう はコミュニティ FM ラジオ局「FREE WAVE」に開局時から出演し、 2011年から「月下虫音」をスタートさせている。公式ウェブサイト: http://lovefm.co.jp/ (2017年7月10日最終取得) 周波数:福岡局 76.1MHz/北九州局 82.7MHz/福岡タワー局 82.5MHz
- \*3 九州大学ソーシャルアートラボは、2015 年に大学院芸術工学研究院 に附属する教育研究機関として誕生した。社会の課題にコミットし、 人間どうしの新しいつながりを生み出す芸術実践を「ソーシャルアート」と捉え、その研究・教育・実践・提言を通じて、新しい生の価値を提示していくことを目的としている。「"面白い"を形にし、"豊かさ"を見える化する」をキャッチフレーズに、様々な異なるものどうしの デモクラティック (民主的) な交流を通して、ポストグローバル時代 を見据えた社会のデザインを考案することを目指している。公式ウェブサイト: http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/ (2017 年 7 月 10 日 最終取得)
- \*4 本研究はラブエフエム国際放送株式会社と九州大学大学院芸術工学研究院による平成 28 年度共同研究「ラジオを活用した地域づくりと地域間交流に関する研究」の一環として行われたものである。なお本研究は単年度の研究である。
- \*5 九州大学ソーシャルアートラボ ウェブサイト http://www.sal. design.kyushu-u.ac.jp/ (2017 年 7 月 10 日最終取得)
- \*6 平成 27 年度には、福岡県八女市の里山を舞台に、地域の人にとって 魅力的な企画や、地域と都市を結ぶ企画を立案するノウハウを培う 合宿型の人材育成プログラムを実施。それ以前にも九州大学大学大 学院芸術工学研究院では、中山間地域の里山や棚田の保全、さらに は 2012 年に起こった水害からの復興などに、現地の NPO などとと もに取り組んできた経緯がある。
- \*7 2016 年 2 月 28 日に実施した「ソーシャルアート・フォーラム 地域と大学との協働」にラブエフエム国際放送株式会社局次長の竹石明弘氏が登壇し、本研究の契機となった。

- \*8 「月下虫音」ウェブサイト(LOVE FM) http://lovefm.co.jp/gekka\_chune/programs/more (2017 年 3 月 31 日最終取得)
- \*9 ラブエフエム国際放送第 122 回番組審議会(2014 年 10 月 8 日) に おける発言。http://lovefm.co.jp/council/1831.html (2017 年 3 月 31 日最終取得)
- \*10「甕の音なひ」ウェブサイト(九州大学ソーシャルアートラボ) http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/kame.no.otonahi/index.html (2017年7月10日最終取得)
- \*11「モノでなくコトの芸術 地域資源と外の刺激で発酵、豊かに」朝日 新聞朝刊 (西部・共通) 2016年05月17日、28面
- \*12「月下虫音」ウェブサイト(LOVE FM) http://lovefm.co.jp/gekka\_chune/programs/more (2017年3月31 日最終取得)
- \*13 2017 年 3 月 12 日 (日) に開催された「LOVE FM FESTIVAL」の 会場で、「月下虫音」リスナー7 名にインフォーマルなインタビュー を行った。事後インタビュー全体の概要は\*17 参照のこと。
- \*14 ラジオネーム「なかはらくん」へのインタビューにおける発言 (2017年3月12日)
- \*15 アートマネジメント人材育成のための実践講座として、アートプロジェクト「FUKUOKA × YAME REMIX」の企画運営を実施した。本論で触れるもの以外には、バスで笠原地区を訪れる日帰りアートバスツアー「里山を編む~天神・奥八女バスの旅~」があった。詳細はウェブサイトにアーカイブを掲載している。
  - http://www.sal.design.kyushu-u.ac.jp/bustour.html(2017 年 7 月 10 日最終取得)
- \*16「FUKUOKA × YAME REMIX」は、SAL を中心とし、平成 28 年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の一環として行った「〈地域づくりとアート〉実践プログラム」の受講生 21 名が運営に携わった。
- \*17 展覧会概要は次の通り。 「縁側のながれ」(ダイレクション:ジェームズ・ジャック、特別協力:大田こぞう(LOVE FM「月下虫音」) 期間:2月4日(土)~2月12日(日) 土・日)12:00~18:30平日)14:00~19:30月)休み \*最終日は16時まで 会場:エンジョイスペース大名
  - 2月 4日(土)トーク+レセプション
  - 17:00 生きる土 (The Life of Dirt): 大橋鉄雄 (お茶の大幸園 | 八 女・笠原)、James Jack (アーティスト) ほか
  - 18:30 糅て音〈かておと〉(Sound Mix): MASUO (CAS Fukuoka) 19:00 オープニングレセプション
  - 2月 5日 (日) 汽水域の渦 (Brackish Water Swirl) 制作:「地域 づくりとアート」実践プログラム受講生
  - 14:00 映画「まちや紳士録」上映会
  - 15:30 トークイベント: 伊藤有紀 (映画監督)、渡邊瑠璃 (ART HUB 三樹荘)
- \*18 対象者と日時は以下の通りである。なおインタビューは本論文の第 一著者により行われた。
  - ・大田こぞう(「月下虫音」DJ) 目時: 2017年3月14日(火)

- 20:30~21:30 場所:ラブエフエム国際放送株式会社会議室
- 波多江和之(ラブエフエム国際放送株式会社コンテンツ部編成企画担当)日時:2017年3月14日(火)20:00~20:30 場所:ラブエフエム国際放送株式会社会議室
- ・「月下虫音」リスナー7名
- ①ラジオネーム「しぶちん」「ロイヤル」「なかはらくん」ほか匿名 3名 日時: 2017年3月12日(日)  $14:00\sim16:00$  場所: LOVE FM FESTIVAL 会場にて)
- ②ラジオネーム「飛んでいくコンドル」 日時:2017年3月16日 (木) メールインタビュー (3/12 に参加できなかったためメールでアンケートを行う)
- \*19 波多江和之へのインタビューにおける発言 (2017年3月14日)。
- \*20 波多江和之へのインタビューにおける発言 (2017年3月14日)。
- \*21 大田こぞうへのインタビューにおける発言(2017年3月14日)。
- \*22 2017年3月9日の放送での大田こぞうの発言。
- \*23 当初は、「石手紙」というアイディアから、八女で拾ってきた石を福岡・天神のまちなかに展示して、終わったら石は八女の川に放つという構想をしていた。「石」を媒介にして福岡と八女の人たちの思いをつなげる企画を検討していたという点は最終的なアウトプットと似ているが、天神の中でも目立たない場所で、知っている人だけが知っている企画、というように行いたいというイメージを持っていた点が、多くの人との関わりを生みづらい構造になっていた。
- \*24 大田こぞうへのインタビューにおける発言(2017年3月14日)。
- \*25 大田こぞうへのインタビューにおける発言 (2017年3月14日)。
- \*26 波多江和之へのインタビューにおける発言 (2017年3月14日)。
- \*27 波多江和之へのインタビューにおける発言 (2017年3月14日)。
- \*28 大田こぞうへのインタビューにおける発言(2017年3月14日)。
- \*29 大田こぞうへのインタビューにおける発言(2017年3月14日)。
- \*30 大田こぞうへのインタビューにおける発言(2017年3月14日)。
- \*31 大田こぞうへのインタビューにおける発言(2017年3月14日)。
- \*32 ラジオネーム「飛んでいくコンドル」の発言(2017年3月16日)。
- \*33 大田こぞうへのインタビューにおける発言 (2017 年 3 月 14 日)。
- \*34 大田こぞうへのインタビューにおける発言 (2017 年 3 月 14 日)。
- \*35 大田こぞうへのインタビューにおける発言 (2017 年 3 月 14 日)。

#### 参考文献

- 1) 田村紀雄・白水繁彦編,『現代地域メディア論』日本評論社,2007年。
- シュラム編,新版マス・コミュニケーション,東京創元社,1968年, 302頁。
- 3) 牛山佳菜代, 地域メディア・エコロジー論, 芙蓉書房出版, 2013年。
- 4) 北郷裕美, コミュニティ FM の可能性: 公共性・地域・コミュニケーション, 青弓社, 2015年, 253~255頁。
- 5) 矢守克也, アクションリサーチ: 実践する人間科学, 新曜社, 2010年, 11 百
- 6) JST 社会技術研究開発センター・秋山弘子 [編著] (2015) 『高齢社会 のアクションリサーチ: 新たなコミュニティ創りをめざして』東京大 学出版会